27AB-pm302

薬学教育における学習意欲とコミュニケーション能力の醸成のための PBL 型実習の実施とその評価

〇前田 智司[1], 飯塚 晃[1], 新井 一郎[1], 池田 満雄[1], 上田 晴久[1], 川久保 弘[1], 北村 繁幸[1], 小林 賢[1], 新木 敏正[1], 高野 文英[1], 高橋 栄造[1], 西川 由浩[1], 伏谷 眞二[1], 船山 信次[1], 山田 泰弘[1]（[1]日本薬大）

【目的】日本薬科大学では、自己表現能力・問題解決能力の醸成のための教育の一環として、2 年次に薬学総合実習(PBL 実習)を実施している。この実習は、文献検索・発表形式、ワークショップ形式の 2 部から構成されている。今回、これら各実習形式の内容とその有効性について 3 年間のデータの評価を行った。

【方法】1 グループを 10～13 名とし、以下に示す内容で各実習を行った。

1）文献検索・発表形式：医学、薬学、生命科学などのテーマについて、資料収集後、発表資料を作成させ、SGD を行い、ブラッシュアップ後、グループ内で発表練習させた。最後に全体での発表・質疑応答を実施した。

2) ワークショップ形式:与えられたテーマに対して、KJ 法による問題点の抽出、二次元展開法による整理、そして問題解決法の立案を SGD にて行った。

本実習の有効性の評価は、実習終了直後のアンケート調査により行った。

【結果】各実習形式で行ったアンケート調査結果は以下の通りである。

1）文献検索・発表形式：自分の課題や他人の発表に関する関心は約 97%と高かった。一方、自分の発表に対する満足度については 54%と低かったが自己採点の結果は平均 71 点であった。「積極的に話し合いに参加したか」、「他者の発表内容を理解したか」など 4 項目に関して自己評価をした結果、4 段階評価において 3.0～3.8 ポイントであった。

2）ワークショップ形式：「話し合いをまとめるためにリードできたか」の評価のみ 4 段階評価において 2.7 ポイントと低かったが、「他者の発言を理解し自分の意見を述べられたか」、「課題内容を十分達成できたか」など 5 項目の自己評価は 3.3～3.6 ポイントであった。

【考察】以上 2 形式による実習中、文献検索形式とワークショップ形式に関しては、ほぼ全員が満足した評価を示していた。毎年本形式による実習を実施してきたが、3 年間ほぼ同じ傾向が認められ、学習意欲とコミュニケーション能力の醸成に有効な方法であることが示唆された。